

# 教団新報

定 価 1部144円(本体133円+共206円)  
予約購読料 1年分 千共 5,150円  
紙代のみ 3,600円  
振替 00140-9-145275  
本紙を購読ご希望の方は、前金を  
そえて、お近くのキリスト教書店  
へお申し込み下さい。  
教会の購読料は負担金に含みます。

発行所 日本基督教団  
169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18  
日本キリスト教会館内 電話03(3202)0546  
FAX03(3207)3918  
URL http://uccj.org  
発行人 道家紀一  
編集主筆 渡邊義彦  
印刷所 株式会社きかんし

見よ、わたしは新しい天と新しい地を創造する。初めからのことを思い起こす者はない。それはだれの心にも上ることはない。代々としえに喜び楽しみ、喜び躍れ。わたしは創造する。見よ、わたしはエルサレムを喜び躍るものとして、その民を喜び楽しむものとして、創造する。わたしはエルサレムを喜びとし、わたしの民を楽しみとする。泣く声、叫ぶ声は、再びその中に響くことがない。そこには、もはや若死にする者も年老いて長寿を満たさない者もなくなる。百歳で死ぬ者は若者とされ百歳に達しない者は呪われた者とされる。彼らは家を建てて住み、ぶどうを植えてその実を食べる。彼らが建てたものに他国人が住むことはなく、彼らが植えたものを他国人が食べることもない。わたしの民の一生は木の一生ようになり、わたしに選ばれた者らは彼らの手の業にまさって長らえる。彼らは無駄に労することなく、生まれた子を死の恐怖に渡すこともない。彼らは、その子孫と共に主に祝福された者の一族となる。彼らが呼びかけるより先に、わたしは答え、まだ語りかけている間に、聞き届ける。狼と小羊は共に草をはみ獅子は牛のようにわらを食べ、蛇は塵を食べ物とし、わたしの聖なる山のどこにおいても害することも滅ぼすこともない、と主は言われる。

《イザヤ書 65 章 17 ～ 25 節》



越谷教会 2018年新年礼拝

2017年11月23日、日本福音ルーテル教会と日本カトリック司教協議会共同開催の宗教改革500周年記念礼拝とシンポジウムがカトリック浦上教会で開催され、招待を受けて参加し、その礼拝に感動し、協議会の発題に感動した。

特に『長崎の声』―苦難の歴史を踏まえて―と

作家永見津平は長崎原爆を扱った小説のタイトルを「長崎五番崩れ」とした。永見はキリスト者ではない。長崎原爆はキリスト教の視点で見なければ理解できないと言った。橋本司祭は「異論もあるかもしれないが」と断りながら、「原爆は、クリシタン村である浦上に落とされた。浦上教会は

原爆投下地点から500メートルのところにあり破壊された。凄まじい破壊を五番崩れとして崩れの極限として見つめるようになった。『崩れ』の究極的奥底にイエス・キリストの死をイメージし、死、この極限の崩れは、復活の希望へとつながる。キリスト、この一点へと搾り信仰を純化する。

原爆の凄まじさは、社会の崩れをも意味し、崩れの極限においてキリストの十字架が示され、十字架は復活の希望を指し示す。原爆が爆発した罪の極限で、キリストの十字架の愛が爆発し、世界に和解と平和と希望が指し示された」と語った。原爆は崩れの極限であり、人間の罪の極限であり、新しい天と地の永遠の命

をいただく。礼拝を捧げる主の民を「主は喜び楽しんでくださる。だから。喜び踊れ」との御言葉が新しい年に響く。『宗教改革500年共同記念集会』では、ルターの「この世を動かす力は希望である」と示されていた。主イエスの十字架と復活、ただ一点に信仰が純化されて真の希望を指し示す伝道の業に取り組みたい。

(第40教団総会議長・越谷教会牧師)

## 崩れの極限で、神の愛が燃え上がる

して、橋本敷カトリック中町教会主任司祭の言葉に魅せられ深く教えられた。プロテストアントが「福音のみ」ならば、カトリックは「福音化」だ。「信仰の一番搾り」をと、ピールの銘柄を連想させながらユーモアたっぷりに

語った。「ルターも『聖書のみ』という主張をもって贖宥状(免罪符)など、あまりに人工添加物が付き過ぎた教会の現状を眺め、イエス・キリストへの純化を目指したものだと思われ。これらの言葉を頼

りに、崩れすなわち福音化の実態に迫ってみたい。それがすなわち平和づくりにつながる」と述べ、浦上崩れの話をした。「崩れの時は福音の純化の時」として語られる。カトリックで崩れと言えば、「浦上四番崩れ」と

して知られている。浦上村はクリシタンの村だ。浦上クリシタンは3度の弾圧を受ける。弾圧は「浦上一番崩れ、二番崩れ、三番崩れ」と呼ばれる。そして「四番崩れ」は特別に強調されている。崩れが福音の純化をもたらしたからだ。三番崩れまでは信仰を隠していた。しかし、浦上四番崩れにおいては信仰を鮮明にし

て檀家寺から離れて、独自に葬儀をしたり、キリスト者であることを隠さなくなった。それで、激しい弾圧があり、キリスト者は「殉教するか、信仰を隠して隠れクリシタンとして生きるか、棄教するか」の決断を迫られた多数の殉教者が出た。そして、長崎原爆を「浦上五番崩れ」として話された。

## 崩れの奥底に横たわる主イエスの死―福音の純化

2018年の新しい歩みが始まった。新しい年に「見よ、わたしは新しい天と新しい

地を創造する(イザヤ書65・17)との御言葉が示された。崩れて行く、この崩れに沈む民に、希望

の言葉が響きわたる。「わたしは創造する。見よ、わたしはエルサレムを喜び躍るものとして、

その民を喜び楽しむものとして、創造する(同18節)。

新しい天と地、そして、出エジプトの民を主は

## 崩れに沈む民―神の怒り

### イザヤ書65章17～25節



石橋秀雄

## 崩れの極限から新しい世界の創造

### 新春メッセージ

人間の創造の主の言葉が示されている。「神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった(創世記1・31)。神が造られた極めて良い世界は、崩され続けてきた。

旧約聖書の示す主の民の歴史は、「神が喜び楽しむ民」ではなく、最後には「主の怒りが燃え上がる」罪の歴史を歩んでしまつた。出エジプトの民を主は

「聖なる神の民」として選ばれ、「わたしの宝」と神は喜び、愛し支えられた。しかし、聖なる民の歴史は、神への信仰が崩れ続け、最後には神の怒りが燃え上がる歴史を重ねて来た。

神の怒りが燃え上がる崩れの極限で神の愛が燃え上がり、新しい世界と新しい人間の創造の御業が示される。





右＝完成間近の新会堂  
上＝2017年クリスマス



## 熊本・大分地震被災教会のクリスマス

### 主が建てられた教会を信じる

#### 別府不老町教会

熊本地震によって被災した緒教会の復興のために祈り、支えくださり、心より感謝する。主の憐れみと皆様の支援がなければ、復興の道筋は到底見出すことができないものだった。改めて、祈られ、支えられている幸いと喜びを心に刻むものである。

九州教区の執行部、教団の会堂等復興支援委員会、教団伝道委員会が祈りをもって配慮くださり、復興支援金や借入金

の拠出を迅速に承認くださったことで、大きく復興への前途が開けた。た

た感謝あるのみである。12月現在の時点で新礼拝堂の外観はほぼ出来上がり、内部の工事に取り組み中である。除却される旧礼拝堂を見たときは、

### 諸教会の祈りの結実

#### 限府教会

2016年4月14、16日にかけて発生した2回の震度7を中心とする一連の熊本地震は、熊本、大分両県にまたがり甚大な被害をもたらした。い

き早く日本基督教団による被災教会会堂等再建募金が展開され、多くの献金が献げられていること

を、まずこの場を借りて感謝申し上げる。震災から間もなく丸2

年となるが、被災地にある教会の再建はなお道半ばというのが現状である。業者の不足、資材の高騰等の影響も大きいと思われる。どうか引き続き被災地を覚えて祈ってくださいるようお願い申し上げます。

そういう中で、2017年2月、限府教会は新会堂の建築を決議した。

早速、地元の業者に依頼、9月に着工、12月に

化の問題があったが、地震による被害も甚大で、専門家による被災度区分判定では「中破」の診断を受けた。それでも毎週10名前後の会衆が礼拝をまもり続けており、その安全な礼拝の場所を確保するために祈りつつこの決断に至った次第である。

早速、地元の業者に依頼、9月に着工、12月に

は完成、引き渡しという運びになった。礼拝堂だけの小さな会堂であるが、木のぬくもりを感じる落ち着いた作りである。

### 新会堂にてクリスマス礼拝を祝う

#### 由布院教会

2016年の地震以来会堂の再建に取り組んできたが、ついに2017年11月に工事完了にて引渡しを受けた。新会堂で

捧げる礼拝は、いろいろ不慣れなところがあったが、多少戸惑いもあったが、感謝に満たされた。クリスマスに間に合ったこと

を心から喜びつつ、教員として保育園の職員とともにクリスマスの準備に励んだ。

12月16日には隣接の聖愛保育園のクリスマス祝

12月24日は、クリスマス礼拝を祝った。隠退教師の佐藤孝義先生に説教

を賜った。力強い説教の言葉に会堂建築の労が癒された。新会堂で初めての聖餐の恵みを味わう幸いを

得ることができた。

その日の夜に、クリスマス・イブ燭火礼拝を祝った。教員・保育園の職員に加えて町の人たちの参加があった。おごそかな雰囲気にも満たされて御子の誕生の喜びをともにすることができた。

その翌日25日には、教会学校クリスマス会が行われた。大人と子ども合わせて109名の参加者が与えられた。聖愛保育園の卒園児、地元の児童クラブの小学生たちが参

加した。子どもたちといっしょに礼拝を捧げた後、ゲームを楽しんだ。みな満足そうな様子で帰っていった。

一昨年、2016年のクリスマスは、保育園の一室や地元の杜協の会議室を間借りして行った。それと比べて、新会堂で過ごすことのできた今年のクリスマスは、やはり充実していたと感じられる。ここまで来るのは大変であったが、これも、神様の導きと、皆様の祈

りとは多大な支援のおかげである。心から感謝するものである。



上＝新会堂と隣接する聖愛保育園外観  
下＝2017年教会学校クリスマス

上＝2017年クリスマス  
下＝十字架を掲げるのを待つ新会堂











徐々に会堂の修繕を始めていたところ、



2011年3月11日、私は東京神学大学で執り行われていた先輩方の卒業式に出席していま

たのは震災の2日後でした。東京で私が恐怖を覚えたあの激しい揺れは、北関東の内陸にある群馬の地にも押し寄せ、震度5弱の地震によって、献堂から59年を経た原市教会の会堂にも被害が出ました。

原市教会は安中教会の枝教会として1886年に創立され、現在の会堂は1952年に完成・献堂されました。清水建設によって建設されたコンクリート造りの重厚な建物ですが、東日本大震災が起る前から壁やトイル、天井などがいたんでおりました。徐々に会堂の修繕を始めていたところ、

東日本大震災による強い揺れに襲われました。地震によって教会学校を行う小礼拝堂が潰れ、トイル、壁、そして天井がますます傷みました。壁にもあちらこちらにひびが入りました。鑑定の結果、天井の修繕が急を要するとの報告を受け、役員会で議論を重ね、約1500万円をかけて天井や壁の補修とトイルの改修という大規模な修繕を決定しました。教会の維持のために積立てていた基本金から約800万円を用いることを決め、さらに教会内で400万円を目標に募金と呼びかけたところ、幸いにも早くに目標額に達しました。また、教団から被災教会と認定され、300万円を教団被災教会支援金より援助していただきました。被災地の教会を覚えて祈り、献金してくださった皆様に深く感謝を申し上げます。



## 宣教師不在校での出張礼拝

宣教師不在校での出張礼拝

宣教師不在校での出張礼拝は、これまで北米・英国の旧INAC(日・北米宣教師協力会)諸教会から宣教師を受け入れてきた諸学校で構成する協議会である。かつてはCOC関係学校協議会という名称だったが、旧COC(内外協力会)の発展的解消により2007年に改称した。

宣教師不在校での出張礼拝は、これまで北米・英国の旧INAC(日・北米宣教師協力会)諸教会から宣教師を受け入れてきた諸学校で構成する協議会である。かつてはCOC関係学校協議会という名称だったが、旧COC(内外協力会)の発展的解消により2007年に改称した。

宣教師不在校での出張礼拝は、これまで北米・英国の旧INAC(日・北米宣教師協力会)諸教会から宣教師を受け入れてきた諸学校で構成する協議会である。かつてはCOC関係学校協議会という名称だったが、旧COC(内外協力会)の発展的解消により2007年に改称した。



伊藤由紀子さん

## 被爆二世として連帯を生きる



ギャラリー喫茶「ギャラリー茶々」店主。下関教会員。

本州最西端の町、下関は、関門海峡を挟んで眼前に九州、門司港が望める。国内外の船舶が往来したこの下関の中心街で、伊藤由紀子さんは祖父の代からの骨董店を継ぎ、ギャラリー喫茶を営んでいる。

伊藤さんは、地元のミッションスクール、梅光女学院に進学し、キリスト教に出会う。当時の恩師、詩人の森田進氏が繰り返した聖句が、今も耳に残る。「後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けよ」(イリビ3・13)。卒業後は後ろのものを忘れた。美大進学のため上京するも、キリスト教を振り返ることがなかった。しかし、主は、伊藤さんを忘

## 御業を喜び歌う歩み

寒さの時、教会の庭で土から芽を出している植物がある。よく見ればあちこちに、蕾をつけて咲き始めている草花がある。蒼々とした葉を冷たい風の中に揺らしているものもある。四季折々の庭の風景として見れば当然の姿である。しかし僅かな寒さに震えている私からすれば、一つ一つが不思議な光景であり、神様の為さることは本当に素晴らしい」と、あらためて思う。もちろん葉を落とした木々も既に春の準備を終え、枝先に堅い花芽や新芽をつけている。

教会はこの季節、主の御降誕を祝い、やがてレントへと向かう。クリスマス喜びは十字架の贖いと私たちを導き、飼いの葉桶のキリストはその命の温もの中で、喜びを歌い続けてきた。主の救いにあずかった喜び、主と共に歩む喜び、主の再臨に向けて使命に生きる喜びである。

この季節、将来への備えを為す木々は堅い年輪をその身に刻む。教会も堅い信仰の年輪を刻みながら、神の御業を見せて頂く、共に働く時を過ごしたい。

(教団総会副議長 佐々木美知夫)